

町史

とっておきの話

215

南相馬市博物館学芸員

稲葉 修

只見とっておきの魚たち ⑤

米粒より

小さい貝がいる！



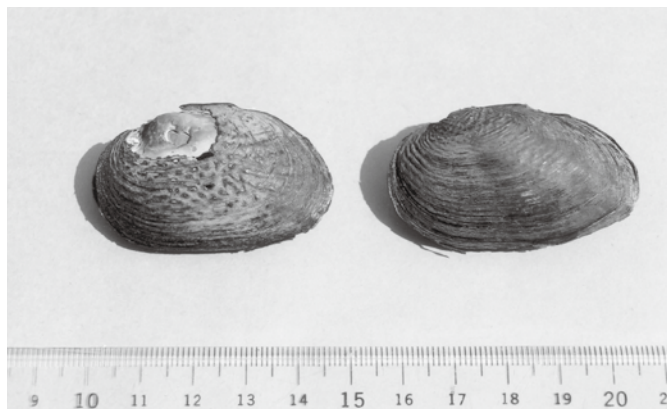
只見町や旧南郷村の伊南川沿いの水路や池などには、かつてタナゴという全長10センチ前後の小さな魚が棲んでいました。在来分布なのか、古い時代に他所から持ち込まれたものなのかは不明ですが、聞き取り調査から考えると、ヤリタナゴという種類のようです。タナゴ類は二枚貝に卵を産みます。貝の中で孵化・成長したタナゴの子どもは貝から泳ぎ出てきます。ヤリタナゴが産卵に利用する二枚貝は、イシガイ科のヨコハマシジラガイとマツカサガイです。只見町ではどちらもカタツケと呼んでいましたが、今では姿を消しつつあります。

ヨコハマシジラガイ・マツカサガイとも、殻の長さは6センチほどです。しかし、ヨコハマシジラガイは殻の表面に粒のような彫刻模様が、マツカサガイにはV字を逆にしたような彫刻

模様があります。これらの二枚貝類にはオスとメスの貝がいて、オスの貝から放出された精子が近くのメスの貝に入って受精します。メスの貝の中で育った貝の子ども（ゲロキジウムといいます）は、大量に水中に放出され、この時、貝のまわりを泳ぐ魚に寄生します。魚の体液を吸ってしばらく寄生したあと、魚からはなれて川底に潜り、水中の植物プランクトンなどを食べて成長していきます。

只見町では一部の水路でこの二種類の貝を見つけたことが、一緒に住んでいる魚は、イワナ・ヤマメ・ウグイ・エゾウグイ、そしてアカザやドジョウ、陸封型カジカ・カワヤツメ河川型などでした。この中で貝に寄生されている魚はどれなのでしょう。

中には、1センチほどの殻をもつドブシジミという二枚貝がいます。殻が半透明のかわいらしい貝で、ドブシジミという名前には似合いません。さらに町内には、大きさが5ミリ以下の二枚貝がいます。マメシジミといい、米粒より小さな貝です。湧水のある水路やブナ林の中の湿地の泥や砂の中に棲んでいて、殻の色は白色や半透明です。5ミリ以下



ヨコハマシジラガイ (左) とマツカサガイ (右)



米粒より小さなマメシジミ